◆陸奥の十一人は、陸奥・陸前・陸中・磐城・岩代をふくむ、今の青森・岩手・福島・宮城の諸県

◆出羽の七人は羽前・羽後、今日の秋田・山形の二県

◆一人も入門者なき国は大隅国（鹿児島）下野国（栃木県）隠岐国（島根県）の三国

◆当時日本六十八ケ国のうち六十五ケ国にわたり門人総数四六一八

◆此表は、当時のまま遺されてきた咸宜園入門簿によるものである。入門簿は塾則により、入門の際、入門の年月日・姓名・年令・国別在所名・紹介者等を自書（一人半枚宛）させられたもので、開塾の初めから淡窓（五十五冊）旭荘（八冊）青村（八冊）林外（十一冊）広瀬豫田（四冊）諫山蒔村（四冊）勝屋諸師（一冊）と歴代諸先生の時代と年次を追い全九十二冊四六一八の門人は、ことごとく此のうちにのせられている

◆ただし他に入門簿の破損亡失したものや名のもれたものがあるので、これを加えると門人総数は優に五千人を越えたものと思はれる

◆今日の県でみると

①大分県	豊後	一、二八五	五五六
一六〇一	豊前	三一六	二五七
	下毛、宇佐郡		二五九
②福岡県	筑後	五五六	
一〇七二	筑前	二五七	
	豊前	二五九	
③長崎県	壱岐	四七二	
四八二	対馬	五五	
④山口県	長門	一五四	
二二五	周防	七一	
⑤熊本県	肥後	二〇七	
二〇七			
⑥大阪府	摂津	一三七	
一八〇	河内	一一八	
	和泉	二五	

◆大分県では

日田郡	七〇一	宇佐郡	七五
下毛郡	二三七	直入郡	三八
大分郡	三一六	国東郡	二二
玖珠郡	一二二	大野郡	二一
海部郡	五七	郡別不詳	六

備考　別項動向欄「教聖広淡窓の壱百年祭と門下生の慰霊祭」を参照されたい。（立川）

伝説の川太郎とかつぱがく（その二）

山本入山

平家にあらずんば人にあらずとまで豪語して三十余国、五百余ケ所の荘園を領し専横の限りを尽した一門が、栄華の夢も二十年哀れ壇の浦の一戦に潰えてより、遂には平家がにを以てその妄執の姿に擬せられようとは。

思ひきや深山の奥にすまいして
雲井の月をよそに見んとは。

庵室に三体の来迎仏を安置して一門の人々の冥福を祈らせ給う女院をはじめ、落人となつてきびしい源氏の詮索からのがれ得た人々も、その末路はまことにはかないものがあつた。

祭　文（かつぱがくの縁起）

抑々当社音楽の由来を尋ね奉るに人王五十六代清和天皇の御宇より源平両家に相分れ代々帝都を守護し奉る。然る処八十一代安徳帝の御代に至つて源平威勢を争ひ平氏は源氏の為めに滅さる。元暦の頃ほい平族都を落ちて摂州一の谷に城廓をきずき先帝を守護し奉る。範頼生田を攻め破れば義経一の谷を攻め落す。

宗盛叶はずして数万の兵を率いて四国八島に落行き或者は長洲赤間ヶ関を落つ、大将知盛を始め平家の一類悉く豊前国柳ヶ浦に到り、二位の尼神璽を持ち、宝剣を帯し先帝を抱き奉り海底に沈み給ふ。

知盛を先とし宗徒の一族海に入つて空しくなり、宗盛、清宗等は生擒られ鎌倉へ渡されけり、残る数千の軍兵等は此処、彼処に落失せて終に筑後国、高良山に棍こもる。その後源氏の人々跡を追て攻め来り、田平の術を習ひ、数百の牛を集め両角に松明を灯し山中に向ひ深更に追ひ放つ、平家の人々かゝる智略に驚きて筑後川に飛び入り残らず空しくなりにけり。されば彼の亡魂河伯水神となつて動もすればあらはれいで、音楽を奏して遊戯をなす。

諸神此の音楽をきき給ひ、和光の眼をさまし結縁の神慮を深め給ふなり、河伯水神に申して曰く末代に至るまで万民皆々我為めに此の音楽を奏し給ひ祭りをなさば、国家安全五穀豊饒にして民豊かに牛馬に災ひなからしめん、嗚呼有難や有難や、唐土天竺我朝に呂律甲乙宮商角徴羽絲竹管絃の音楽品に在りと雖も此の音楽に如くはなし。

此音楽と申すは往昔筑後国御井郡千代嶋の中村より始るものなり、万歳楽、万歳楽

この祭文は玖珠郡八幡村御大（だつおん）神社に伝わるかつぱがくであつて、がくは世話前より天狗一人、清道持一人、赤鬼一人、青鬼一人、がくの庄屋二人巻物持一人、大太鼓持二人が出場し、巻物奉読一人、杖宰領一人、杖持六人、笛吹四人、太鼓宰領一人、大太鼓打二人、大鐘二人、小太鼓一人、小鐘二人、銅拍子二人、川太郎宰領十人、川太郎四人は崇敬者から奉仕される。この奉納がくは厳密に云えば玖珠、日田方面に伝わる型式の代表であつて、雲八幡のかつぱがくとは稍々その趣きを異にする。

しかし文禄四年十一月にはこのかつぱのがくが下毛郡山国村白地の亀岡神社に伝わつた記録があり、元文二年七月四日から祠事の方式に若干の変更が行われたとも伝えて居る。かつぱがくの祭文にある平氏の末裔と古文書との比較も此際述べておく必要があろう。両豊記戦記篇によれば文治年中より建久年中に至つて平家の残党九州に蜂起して郡県穏かならず豊前国規矩掃部介高政、絲田左近大夫貞義と云う者、前亡の余類を駆集め国中既に乱れんとすと聞えければ、建久六年の

春、宇都宮大和守藤原信房に豊前国西四郡を賜りて、手勢五百余騎にて豊前に下り仲津郡今井津に着岸し、此処に暫く在陣して国中を討ち従え高政、貞義滅亡してよりその後筑城郡城井の郷に城を築く、これ豊前国宇都宮氏の元祖たりと誌してある。当時の古戦場と伝えられる耶馬溪村の家籠には千人塚の一本櫟（いつぽんくぬぎ）と呼ぶ巨大なる老木があり、傍の碑石には次の文字が刻されて居る。「伝聞此塚古来千人塚往古源平時代埋戦歿武士自今百十有余年前後塚上石碑建設仁在而該石碑戦歿者出身地被為密送地と」と、附近には平家の落人にまつわる遺蹟があまた伝えられて居る。

一本櫟で敗退した平家の残党のその後に就いて玖珠郡誌は、平家山は松木村の東二里許りにあり玖珠郡第一の深山なり、高嶺なり、昔平家の落人多く籠居したる処なり、その党大望を果さず、終にその妄執猿となり、享保の頃までは平家の百猿として猿多く棲めり云々。

宇都宮の善政は四百年十八代に及んだが地方にある大勢力の覆滅を企図した秀吉は黒田孝高と謀り謀略結婚によつて遂に宇都宮を滅したのであつた。宇都宮が宣撫による穏かな政治を行つた結果、落人の間には飽迄平家の再興を志した者もあつたがその多くは或は歌舞音曲を業とし、或は山奥深く隠棲し、又或は川のほとりや海辺の近くをさ迷うて露命を繋ぐものも少くなかつた。そして夫等の人達が重盛の封地であつた豊前の土地に集まり宇佐大宮司はもとより平氏に好意をよせた土地の人達になついた事は寧ろ当然であろう。されば北条五代目の執権時頼が最明寺入道と号して諸国遍歴の途次たまたま中津市三保区北原の大師堂で病み臥したとき村人達の心からなる看護で全快した、その快気祝の席上村人達の演じた人形踊りを賞した時頼が「当所は海にもそわず、山にもつかぬ土地柄ゆえこの踊りを業として渡世せよ」との激励が意味深長な何物かを伝えて居る様にも感じられる。

今の中津市が街としての形体を整えたのは天正十五年黒田孝高が広津山中津川の城を毀ちその一部を現在の城址に移してからであり、当時山国川の河口にあつた一つの三角洲に過ぎなかつた大城の周辺を埋めて城下街の建設に着手したのは細川忠興である。従つてその完成は小笠原の入城した寛永年間である。川太郎の伝説が中津地方に伝えられたのはそれ等の事情からして黒田入城以後であることも事実とよく符合する

彼の有名な円応寺のかつぱ伝説発祥地庄村では古い昔からかつぱの祭りが行われて居り、その祭典にはかつぱを鎮めるため必ず北原の人形芝居を行わねばならなかつたとの古事が残されて居る。

中津には此の外自性寺にも次の様な物語りが伝つて居る。天明五年の秋十月頃のこと西国東の真玉村、真玉寺に恵欣と呼ぶ十二、三の小僧が居た、或日いたずらにも寺の古池に何か目標をつけて石を投げた、処がそれがはからずも河童の大将弁金太郎の頭の皿にあたりそれが因で弁金太郎は死んだ、その子ケンビキ太郎とその母親は悲しみのあまり恵欣を悪みその復讐の為め恵欣をひどく苦しめた、これを知つた自性寺十三世の海門大和尚は恵欣を自性寺に引取りケンビキ太郎母子を呼び出しねんごろに訓戒して詫証文を書かせ、その代り弁金太郎には義晴紹栄居士の法名を授け、更に寺内に墓を設け今に至るまで供養を怠らない。のみならずケンビキ太郎の為めにも墓を建て、彼等を再び悪道に堕ちない様仏法の功徳に浴させて居る。

（大分県文化財専門委員）